折笠紀恵（スクールリーダーシップ開発専攻）

怒ること，しかること

1. 教育を考える一言

「したことの悪さより、しかられた傷のほうが大きいということはないでしょうか」

2. 背景

著者の大村はま先生は，73 歳まで公立中学校の現役の国語教師であり続けました。そんなはま先生は，小学校時代図画が苦手でした。はま先生が小学校 5 年生の時に，絵画の宿題が出され，上手くいかず泣いていた時，絵が上手な先生のお姉さんが手伝ってくれました。そして，その絵が学校で，友達から「上手！」と言われ，先生からは「たいへんよい」という評価をもらい，今までにない絵画の良い成績に夢のようにうれしい気持ちになりました。

はま先生は教師になってから，絵を評価してくださった先生のことを思い出しました。ベテランだった先生は，きっとはま先生の絵が，一人で描いたものではないことに気が付いていたでしょう。しかし，はま先生は，あの時の自分の行動をしからずにいてくれたことを，「私の小さな一度の幸せを守ってくださったのだと思います。」と述べています。そして，はま先生は，最近の教育現場では，しからなくても大過ないことを，軽率にしかることがよく行われているのではないかと疑問視し，この上記の一言を残されました。

3. 考察

一昨年，教育実習で母校にお世話になった時に，国語科の先生から頂いた本から引用しました。他にも沢山の「教育を考える一言」が載っていますが，たまたま今私が小学生と関わることが多く，怒ったりしかったりしなければならない場面に出くわすことが増えたこともあり，この言葉が一番印象に残りました。

私もよく，怒られたりしかられたりした時，何をしたかよりも何と言われたかがいつまでも残ることが多くあります。そして，子どもと接する際は，些細なことではなるべく怒ったりしかったりしないように心がけています。怒ったりしかったりすると，怒る方も怒られる方も，精神的なエネルギーをとても使う気がするからです。しかし，時としてそういう場面に出くわした時は，一度立ち止まって，この子の心に響くような，そうであって傷にならないような言葉は何なのかということを考えながら選ぶようにしています。なかなか難しいことですが，これからもこのはま先生の言葉を胸に刻み，実践していきたいと考えています。

参考文献

大村はま『灯し続けることば』小学館，2004 年.